

## 令和3年度都立看護専門学校社会人入学試験小論文課題

次の文章を読んで、設問に答えなさい。

日本の会社では、新入社員は、どのように仕事を覚えていくのでしょうか。どうやって仕事の情報収集をしているのでしょうか。彼らは、まず「見る」こと、「観察する」ことから始めます。まわりの上司や先輩の仕事ぶりを「見」ながら、「見よう、見まね」で仕事を覚えていきます。上司や先輩から、言葉での細かい説明や指示を期待するのではなく、自分の「目」で見て、仕事を覚えていくのです。まわりの人たちも、当然のこのように「見ればわかる」と思っているのです。くわしい説明をしようとしません。

こうして、まわりの人々の仕事のやり方を観察し、人々の顔の表情、視線、しぐさ、雰囲気などを通して、言葉でたずねることなく、「空気を読む」ことで情報収集を行うのです。このように、人間関係そのものである「コンテクスト（文脈・意味背景）」に意味を見いだそうとする情報収集が行われているのです。「よく見れば、わかる、言われなくてもわかるはず」という無言のコミュニケーションが優先される文化なのです。

しかし、この「空気を読む」という情報収集のしかたは、「言葉」での情報収集よりもはるかに高度でむずかしいコミュニケーションの方法です。言葉がないのに、他人の意図を理解しなければならないのですから。空気が読める能力は、短時間ですぐに身につくものではありません。自分の属する人間関係の中で、長い時間をかけた訓練と学習と経験を通して、初めて身につけることのできる能力なのです。

高文脈文化は、このように強い人間関係の中に多くの情報が張り巡らされ、言わなくてもわかる、空気が読める「感性のコミュニケーション」が成り立つ文化です。世界の中でも、日本は、空気を読むことができる、あまり例をみない独特のコミュニケーション・スタイルをもった高文脈文化の国なのです。

日本のことわざの中にも、日本の高文脈文化を証明するものがたくさんあります。「以心伝心」「口は災いのもと」「目は口ほどにものを言う」「出る杭は打たれる」「能ある鷹は爪を隠す」「沈黙は金」「言わぬが花」「一を聞いて、十を知れ」などのように、言葉で話すことよりも、相手の気持ちを推測し、空気を読むことのできる感性のコミュニケーションが奨励されているのです。

出典：荒木晶子、藤木美奈子著（2020）「自分を活かすコミュニケーション力」  
実教出版株式会社

（設問）

著者が伝えたいことを 240 字程度に要約した上で、「コミュニケーションのあり方」について、経験を踏まえたあなたの考えを、要約を含めて 1,200 字程度で述べなさい。